授与する学位の名称	修士(世界遺産学) [Master of Heritage Studies]	
人材養成目的	世界の文化遺産・自然遺産が直面する問題の所在を政治・経済・社会・自然環境など様々な側面から総合的に把握し、その保護のための課題を解決する理論・技術を習得し、世界遺産条約に基づく世界遺産はもとより、広く国内外の文化遺産・自然遺産の保護に貢献できる高度専門職業人を育成する。	
養成する人材像	文化遺産・自然遺産の保護と評価のための理論、文化遺産・自然遺産の管理・修復のための技術、文化遺産・自然遺産が直面している問題の所在を総合的に把握し、国際社会が目指す目標との関係において課題を的確に設定し、解決できる能力を有し、文化・自然遺産の保護のため、一般社会の広範な領域にまたがる関係者と自在に交渉することができるコミュニケーション能力を持つ人材を育成する。	
修了後の進路	博士後期課程への進学。国や地方公共団体の職員、研究員等。文化遺産保護・国際協力分野の公的機関やコンサルタント関連企業及びマスコミ各社等の職員、研究員 ほか。	
ディプロマポリシー		
筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士(世界遺産学)の学位を授与する。		
知識・能力	評価の観点	対応する主な学修
1. 知の活用力: 高度な知識を社会に役立てる能力	① 研究等を通じて知を社会に役立てた(または役立てようとしている)か ② 幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
2. マネジメント能力: 広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	① 大きな課題に対して計画的に対応することができるか ② 複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
3. コミュニケーション能力: 専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	① 研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ② 研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
4. チームワーク力: チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	① チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ② 自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
5. 国際性: 国際社会に貢献する意識	① 国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ② 国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	World Heritage and Civil Participation (世界遺産と市民参加)、国際インターンシップ、海外留学、海外学会発表など
6. 共通知の活用力: 文化・自然遺産保護に共通する知識を社会に役立てる能力	文化・自然遺産の保全に関する幅広い知識を社会に役立てようとしているか。	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
7. 専門知の活用力: 文化・自然遺産に関する高度な知識を社会に役立てる能力	文化・自然遺産の保全に関する専門的知識を社会に役立てようとしているか。	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
8. 共通技能の活用力: 文化・自然遺産保護に共通する課題の解決に対応する能力	文化・自然遺産の保全のため、広い視野から問題解決に取り組むことができるか。	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
9. 専門技能の活用力: 文化・自然遺産保護の専門的課題の解決に対応する能力	文化・自然遺産の保全のため、専門的能力を活かして問題解決に取り組むことができるか。	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど

10. 国際実践力:国際的視野を持って、文化・自然遺産の保護に取り組む意識	文化・自然遺産の保全のため、国際社会に貢献する意欲と語学力を身につけたか。	World Heritage and Civil Participation (世界遺産と市民参加)、国際インターンシップ、海外留学、海外学会発表など
学位論文に係る評価の基準		
<p>(修士論文審査)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 修士論文審査専門委員会は、主査1名、副査2名により組織する。3名のうち、主査を含む2名は世界遺産学学位プログラムの専任教員とする。 2. 修士論文審査専門委員会の主査・副査全員出席のもと、個別審査を非公開で行う。ただし、他の教員等の参加の必要がある場合には、主査・副査の協議により、その取り扱いを決定する。個別審査は、通常1回とするが、必要がある場合には、主査・副査の協議により複数回行うことができる。個別審査では、主査・副査全員の合意により合格、不合格を決定する。 3. 公開審査では、個別審査の結果を踏まえて、学位プログラム教員全員により審査を行い、合否判定は専任教員会議において決定する。病気等やむを得ない事情により、公開審査会を欠席した学生の扱いは、専任教員会議において協議する。 <p>(評価基準)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 世界遺産学の修士論文として適切なテーマが設定されていること(問題意識・課題設定) 2. 先行研究を踏まえた論文の位置づけが明確であること(研究の位置づけ) 3. 課題にふさわしい研究方法が選択されその論拠が信頼できるものであること(研究方法、論拠の信頼性) 4. 論旨展開が十分で、全体に大きな矛盾がないこと(論文の構成) 5. 研究の実施および結果の公開において倫理的な問題がないこと(倫理) <p>(評価項目)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 独創性:導入した概念や方法、発見した事実や法則のいずれかが新規であること。既知の方法の改良、異なる分野からの応用等を含むこと。 2. 萌芽性:研究の着手段階であるが、新規な発想、着想に基づく研究で今後の発展の可能性の大きなものであること。 3. 発展性:従来の定説を変え得る新事実の解明、あるいは新しい研究領域や研究体系・技術体系の開拓等の契機と成り得るものであること。 4. 有用性:技術の向上、あるいは実用上、学術上に価値のある有用な情報を提供するものであること。 		
カリキュラム・ポリシー		
世界遺産のみならず文化財の保存・修復、文化・自然遺産の保全、遺産地域のプランニングとマネジメントに関する幅広い知識と専門的な能力を身につけるため、実践的かつ学際的な学修課程を編成する。		
教育課程の編成方針	<ul style="list-style-type: none"> ・大学院生全員が履修すべき必修科目とそれぞれの専門技術を身につけるための選択科目に分類し、効率的な履修ができれば教育課程を編成する。 ・選択科目群については、国際遺産学、遺産の評価と保存、遺産のマネジメントとプランニングの3分野に分類し、大学院生の専門性に合わせてバランスよく単位を取得することができるように配慮する。 	
学修の方法・プロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次では、必修科目「世界遺産論」において各々の研究計画を発表するとともに、必修科目「世界遺産特別演習」において指導教員から指導を受けつつ、1年次末に研究計画をまとめる。 ・1年次から2年次にかけて、国際遺産学、遺産の評価と保存、遺産のマネジメントとプランニングの各分野の選択科目の中から、大学院生の専門性に応じた授業・演習を履修する。 ・2年次では、必修科目「世界遺産特別研究」において指導教員から指導を受けつつ、修士研究中間発表を行い、他分野の教員からの助言も受けながら、最終的に修士論文をまとめる。 	
学修成果の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次の秋学期末に、全教員の前で研究計画を発表し、学修状況の審査を行う。 ・2年次の秋学期に、修士研究中間発表を行い、修士論文の執筆を進める。修士論文が提出された後、主査1名、副査2名で構成される論文審査委員会の審査を受け、公開発表会を行う。 	
アドミッション・ポリシー		
求める人材	世界遺産の保護管理や活用のみならず、多様な文化の交流と継承に関する国際協力、生物多様性をはじめとする地球環境への取り組み、観光を含む地域振興の取り組みなどに対して、幅広い関心を有し、研究活動に必要な学力と資質を備える学生を求める。	
入学者選抜方針	入学者の選抜は、外国語(英語)の提出スコアならびに口述試験に基づき、世界遺産学に必要な、語学力、基礎的な専門知識、研究能力を総合的に評価する。	